

第4回京都府プレコンセプションケア推進に係る検討会 議事概要

1 会議概要

日 時：令和7年3月5日（水）午後6時から8時

場 所：京都府庁3号館地階第7会議室

出席者：委員5名、オブザーバー9名

2 協議事項

(1) 高校生教育プログラムについて

①高校生教育プログラムの最終案について

- ・動画の視聴
- ・事務局より資料1に基づき説明

②高校生教育プログラムの周知及び活用について

- ・事務局より資料2に基づき説明

(2) 「きょうとプレコン」について

- ・事務局より資料3に基づき説明

3 主な意見

【高校生教育プログラムの最終案について】

<動画について>

- ・医学的な内容を正しく伝えること、硬い雰囲気にならないようできるだけ柔らかい表情で話すことを心がけた。聞きやすく、医学的に正しい内容になるよう編集していただいたので、今後、プレコンセプションケアが高校生や府民の中で広がることを期待している。
- ・とても親しみやすいものになっており、高校生にとって婦人科受診への敷居が低くなるように感じた。「何かあったらすぐに婦人科医に相談してくださいね」というメッセージが印象に残っている。
- ・画面の切り替わり時にちょっとしたメロディがあっても良いと思う。今の高校生が見ている動画は、音声があるものが多いので、音声が入ると見やすくなると思う。
- ・「生理、月経」「射精、性交」、言葉一つに対しても、「とんでもない」という大人もまだまだいる中で、医師という専門家がすっきりと明瞭な言葉で説明しているため、学校現場の先生にとっては使いやすと感じた。また、先生や生徒だけでなく、保護者にも見ていただけると良いと思う。

- ・とても分かりやすく、動画単独での使用も可能なため、授業で1項目だけを視聴する等、学校現場での活用の可能性を感じた。

<その他プログラム全体について>

- ・先日、秋田県で10年程前に作成した資料について、SNS上で炎上するということがあった。今は医学的に正しく、認められている内容であっても、社会の流れによって、その時代、その時の考え方により、内容をアップデートする必要性を感じた。このプログラムも継続的にアップデートできると良い。
- ・「選択できる未来を増やそう」というキャッチコピーは、高校生に対して「どんな未来でも応援するよ」という感じを受け、とても良いと思う。
- ・きょうとプレコンは、幼児期から社会人に至る切れ目のない人生を通じた生涯学習、生涯教育であると考えられ、今回は高校生をターゲットとした高校生教育プログラムを作成されたと認識している。学校教育では、学習指導要領に基づき指導すべきなのは大前提だが、プログラムの活用によって、正しい知識、適切な行動選択ができるような学びにつながると感じた。また、現場の教員にとっても医学的な知見に基づく指導が可能となったり、教員の指導力の向上にもつながったりするのではと感じた。

【高校生教育プログラムの周知及び活用について】

<周知・活用について>

- ・今後、学校保健や保健体育に関係する教員等を対象とした研修会等などを通じて、プログラムの活用について紹介していきたい。性に関する指導は、避妊や性交等に関するHow Toに注目されがちだが、このプログラムでは、人間関係やジェンダー、性暴力の防止等、指導の幅が広がる点についても伝えていきたい。また、生徒が自分の体と向き合い、不安や悩みを抱えたときには、相談できる医療機関や社会的な窓口があるということ、このプログラムを通じて教員から生徒へ伝えてほしいと思う。
- ・このプログラムをどう活用し、どういう課題に向き合うのか、向き合った課題をどう解決していくかについて、教員それぞれが考え、授業展開を考えていけるよう、教員向けの研修会等を通じて伝えていければと考えている。
- ・各学校宛てに周知されるタイミングに合わせて、教育委員会からも各学校宛てに周知を行ったり、校長会等でも周知をしたりしていきたい。

- ・私立の学校の場合、プログラムの活用については各学校長の判断となるが、校長会での紹介等周知に協力していきたい。
- ・学校現場では、授業をどの教科でどの程度時間を使い、いつやるのか等、どのタイミングで決めているのか。また、校長にこのプログラムを伝えたあと、どのような流れで実際に授業が行われることになるのかを教えてください。
- ・校長会で校長に知っていただき、その次に全体会や各教科会で教材の周知をしていく方法が考えられる。
- ・他教科との連携については、保健体育科に限らずクロス授業という形で試行している場合はあるが、その分野に興味や関心の高い先生同士が「一度試しにやってみましょう」ということはあっても、教科としてクロス授業に取り組む状況にはまだなりづらい状況である。
- ・校長会へ伝達すると、校長先生から関係する分掌に情報がおろされることになるので、保健体育科の教員や養護教諭を中心におろされ、各教員が、学校の状況等に応じて活用方法を検討する流れになると思う。
- ・年間授業数は決まっており、保健であれば1週間に1回、1単位となる。この状況で、プログラムに3時間、6時間をあてられるかは、各学校の状況によるが、このプログラムは必要な部分の切り取りができたり、もう少し深めたいと思う時の発想を広げるツールとして活用できたりするため、有効なものになると思う。
- ・プログラムの活用にあたっては、教員への研修が必要だと思う。教員自身が性に関する教育を学んできていない現状もある。外部講師を呼ぶ等、適切な方法で、教員が学べる場を作っていただきたい。
- ・このプログラムの活用の場として、教科であればまずは保健体育科になるのかもしれないが、他教科、あるいはクラス担任からの個々の指導等でも活用できる仕組みとして保健主事の役割が考えられる。保健主事に対しても研修会等でこのプログラムについては周知をさせていただき、保健体育科に限らず、カリキュラムマネジメントの視点にたって、特別活動等でも実施できるよう考えていきたい。
- ・相談先一覧はトイレに貼るのが良いと思う。トイレは一人になれるので、そこでQRコードがあれば、すぐに相談先につながることができ最悪の事態を防げるかもしれない。

<プログラムの評価について>

- ・プログラム評価のためのアウトカム指標について、どのくらい実施されたか、実施によってどんな変化があったか、この2つの軸を考えたが、実際はどう考えているかを教えてほしい。
- ・アウトカム指標については、現時点で決まっているものはないが、今後の展開においてもどのような効果があったかは必要となるため、今後検討していきたい。
- ・プログラム評価について、実施した教員の評価だけでなく、生徒からの声も収集していただき、ブラッシュアップの材料にしていきたい。

【「きょうとプレコン」について】

<学校現場以外での取組について>

- ・京都市では平成28年度から、次世代はぐくみプロジェクトとして思春期健康教育を実施しており、各区役所・支所子どもはぐくみ室の保健師が、年間約40校を対象に実施している。各学校の要望に応じた講義だけでなく、赤ちゃんの抱っこ体験、沐浴体験、妊婦体験ジャケットの着用等体験型の内容も含んでいる。次世代はぐくみプロジェクトは、プレコンセプションケアの視点を盛り込んで実施しているため、令和7年度以降も引き続き取り組んでいきたい。
- ・きょうと妊娠SOS・性の相談LINEの相談員を担当したが、「妊娠したかも、させたかも」という相談が一番多かった。女性だけでなく、カップルで相談しているような雰囲気を感じることもあった。SNS相談は短いテキストでの相談になるので、かなり特殊なテクニックが必要だと感じた。助産師は電話や対面での相談には慣れているが、短いテキスト相談に対しては素人なので、助産師だけで相談を実施する体制にリスクを感じることもあった。幸い、全国妊娠SOSネットワークの支援を受けることができ、ロールプレイ等の研修でテクニックを学ぶ等とても勉強になった。
- ・妊娠SOSはテキスト相談だけなので、その後の支援につなぐためには市町村の保健センター等行政とのスムーズな連携が必要だと感じた。また、この相談は実際の年齢は分からないが、若者と思われる方から短く素っ気ないメッセージが入ってくるからこそ、丁寧に相手のことをくみ取りながらやりとりを行うようにした。その結果、AIが答えるのではなく、助産師という人間がやりとりしていることを、相談してくれた若い方も感じ取ってくれているからこそ対話が進んだと実感したこともあった。
- ・健康対策課では、感染症、食生活、飲酒、やせや肥満、たばこ対策、健診受診率向上対策等プレコンセプションケアの取組と一緒に提案していけるものがあると思う。また、京都府保

健医療計画においても、女性特有のやせや、子宮頸がんワクチンにも触れているため、今後一緒に取組ができればと考えている。

- ・市町村の保健師は、これまでは特定妊婦への支援や出産後に関わることが多かったが、事務局からの報告の中で幼児期から大学生・社会人等幅広く取り組むとの話もあったので、様々な世代に対し、市町村の保健師含め、一緒に取組を進めていきたいと思う。

<関係機関との連携について>

- ・学校内での教科を超えたクロス授業の取組を聞き、とても良いことだと感じた。行政の中でも健康・福祉に関する部署だけでなく、人権やジェンダーに関する部署等でも、このプログラムを使用していく等の可能性についてどう考えているか。
- ・行政内での連携については、ハードルもあるが、まずは健康部門との連携や、学校教育の中での連携を進めているところであり、今後何ができるかを検討していきたい。

<全体を通して>

- ・2022年に出生数が82万人を割り、2025年は70万人を割るかもしれないといわれるくらい、少子化がかなり進んでいるが、教育だけでなく、産みたい人が産みたいだけ産める、そんな社会の改善も必要だと思っている。また、不登校のこどもの数や、自殺者数も増えており、その中にはLGBTQの人も含まれていると思う。あるNPO法人の調査ではLGBTQの人の自殺念慮と自殺未遂の件数が一般の方よりも約4倍高いと言われており、子どもたちの命を守りはぐくむという意味では、プレコンセプションケアの内容は教育の上でも役立つと思うので、今後普及させていきたいと思っている。
- ・今後、学校や生徒の状況に応じて、このプログラムを現場でカスタマイズしながら、多くの教育現場でこのプログラムが活用され、生徒や先生方の理解が深まることを期待している。今後も、活用状況や活用効果について、それぞれの立場で見守っていただき、一緒に取組を進めていただきたく思う。

以上